ち の毒だが、 Þ 親 分、 下さる 松 が ま 玉 屋 除と 4 か れ に た 取 ば つ て か は、 りの ところへ、 この上もない こんな話を持 大難 込 聴 7 ゃ 気 つ

ました。 玉屋金兵衛 町 人ながら諸 は、 大名 五十がらみ 0 御 用 達を 0 分別顔を心持翳らせてこう切 勤 め、 苗字帯刀 まで 許 さ れ ŋ 7 出

た 御 *( )* 何 用 で? 聞 に は 盆 も正 月 bあ り ゃ しませ ん 0 そ の 大 難 ع 11 う は 11 9

済 隠 げ 紛 唸 居様 した蝉丸 ま 製り 玉 ŋ 銭 じゃな 品 した。 ぬ 形 よう 城に 聞 ع でも の平次は 0 御迷惑は える正月十三日、 ろだ」 の香炉、一 あ も代え難 な美し い、さる大々名から、 ŋ たった香炉 膝を進めます。 い青磁だ。 紛 至って小さいものだが、 失とわ ح いと言われた天下の名器で、 通 りでな 一つと言 か よく晴れた日の朝 それが、 れ ば、 *(* ) 往来にはまだ追羽子 新年の大香合せに使うために拝 ってしまえばそれまでだが 私 内 々 はまず腹でも ゆうべ私の家 で 御貸下 これが稀代の名器で、 0 うち 公儀 げ 下 切らな 0 0 のことです。 音も、 す 奥座敷か 御書き上 9 けれ 凧た ば

0 で 次は な 11 黙 0 はよ つ て 聴 < 解 ( ) て ります お ります が、 玉屋金兵衛 の困惑は容易 0)

ばれたく な つはともかくとして、 でも叶わない。 い。折入っての 分は、 こんな事を お 上 願 0 いよ いだが、 御 頼 さる大々名 いよ香炉が出て来ないとすると、 W 用を勤 ではすまな 何とか める身体だ。 のお家の瑕瑾ともなるかも解 (J と骨折 が、 ح つ れは金ずく 香 ては下さるまいか」 炉 の紛 失は 私 でも の 命 力ず

あ ぬ ら 宜 わ つ 玉屋金兵衛は、畳に手を突かぬばかりに頼み入ります。大町人 て け · 風格 ゆ って 0 あ うございます。それほどの品が無くなるのは、 こうまで言 見るとしましょう」 ることでしょう。 のうちに、 わ 茶や香道で訓練された、 れると、 出る 平次も か 出な むげには ( ) か はともか 一 種 断り切れません。 の奥床しさが くとして、

「有難い、親分」

ところで、 無くな つ た 0 は 何 時 のことでござ ます」

昨 夜 0 宵 のうち、 詳 く言えば、 戊刻頃ま は確 か 9

たが、今朝見ると無くなっている」

「怪しいと思った者はありませんか」

うが か 木 ら は ったことに、 容 易 入 れ その るはず 部屋 は は な 一方 4 か 口で、 5, 家 手 0 前 中 0 0 部 者 屋 だ に ろ う 4 た 思

は、 私 0 娘お 幾く 0 踊 友達、 親 類 のよう に 付き合 つ 7 11 る、 お 糸

11 う に な つ た ば か りの 娘だ けなんだが

そ 玉 屋 間 か 金 兵衛 取 ŋ お 0 具合 店 調子 ^ は、 行 でも見たら、 つて、 その娘に疑 みんなに引き合せて貰いましょう。 また何か気が付くかも いをか けたく な *( )* 様 知れませ 子 で

Lの音炉 「ん と 」

「そ れ Þ 親 分、 何 分よろ 頼みますよ」

少し言 い足ら ぬ顔 ですが、 さすがに大店の主人らしく、 言葉少

なに引揚げて行きます。

その後ろ姿を見送って、

「親分、大変なことになったネ」

ガラッ八の八五郎は乗出します。

子 命 でも縊るような と釣替 何が大変な 0 お 椀 と大 に考え した違 んだ、 てい 事 があ るようだが、 11 があるも っちゃ悪いと思うから乗出す気に 大名高家では、 の こちとら か。 そんな事で玉屋 青<sub>いじ</sub> 0 の 香炉 眼から見れば、 つ ٤ 0 主人 な 人 間 つ 猫 た 首 0

そん な話 じ や ねえ、 親分、 大変と言っ たのは、 あ 0 娘 で すよ」

「玉屋のか」

のさ。

俺

は宝物

の詮議など、

本来なら真

っ平だよ」

せん いえ、 が、 そ 玉屋 0 踊 0 友達 娘 0 お 0 幾は お糸と 世間 ( ) う 並 0 0 を 推首 が 大 変なんで で、 なん 0 変哲 P り ま

「何が大変なんだ」

娘は 貰 Ŧī. 番と言 郎 親 わ がは本 が 本 ると 郷 郷 命 つ が 番 か ても文句を言う奴はありゃ <u>一</u> け 0 き İ 町 の参りよう 0 内 り、 古道具屋与次郎 0 ょ、 若 う、 11 で で、 すよ。 衆を 貧乏人 ワ ク あ ワ ん ح ク の しません。 な i s う、 させ 娘を承知 ピカ 大跛者 て ピ 力 ( ) 玉屋 ます す 0 上、 る 0 0) 愛嬌者 0 貰う 息子 は、 の だ 江 が、 金 戸

よう そ 平 次 e s は つは 立 初耳だ。 ち が り ま 何 か た。 筋 が深そうじゃな が、 煙草入 を 懐 *( )* か、 に 入 行って見るとし れ て お 静 羽

織 を出させ 白は、 て いると、 親分さんは 11 5 つ ゃ 11 ま ようか」

\_

屋敷 います て 帰 私 は本郷 り ^ 引渡されそうに っこは 娘を あ お 1 助 りませ 目 け下さ 0 古道具屋与次郎 な ん つ *( )* ております。 娘 0 お糸が盗人の疑を受け でございます。 引 渡されたが最後、 お 願 て、 11 で 生き 大名 ござ

ます。 と鼻水と そう言うのは、 緒にか なぐり上げて、 五十に近かろうと思 生 懸命さが無精髯 わ れ る見る蔭  $\boldsymbol{b}$ な 0 面 11 男、 に溢 涙 れ

生活に疲 ガ ラ ッ 八 れ果てた顔 の言 つ た には、 通 り、 右 いたましいやつれさえ見えます。 の 脚は 大怪我でもしたらし e s

11 て話 娘 が どう して見るが宜 したと言 *€* √ 11 なさるんだ。 それだけじゃ解らない、 落着

平次はさり気な

<

、宥めて、

ともか

くも座を設けてやりました。

てお いま 願 したが、 難 うございます、 11 申上げたら、 フト思い 付 親 ヒ 分さん。 3 いたのは銭形の親分さんの事で、 ッ ع 助け 私はまア、 て下さることもあろう どうなることか 打明け か と思

「そんな事はまアどうでも宜 話 は要点を遙 か に 外 れ て、 ( ) ともすれば として、 娘 愚ぐ がどう 痴ぉ に な りそう たと で いうん す だ。

それを聴こうじゃないか」

エ 実はこう言うわけでございます」

与次郎はたどたどしい調子で話し始めました。

ど前 遊 下げ 生 う 手で 0 び で か す 行 ら 伝 に 0 道 死 玉 屋 具 う 0 別 を ち な 0 養 並 姫 れ た 息 様 11 べ 子 娘 て 0 0 ょ は 0 お 幾 う 金 細 Ŧ. ع 々 に 八 年 郎 踊 と ع Þ 美 前 0 相 つ 弟 て 好 子 来 輝 人 11 た 娘 か 仲 で 懇 与 に 意 次 お な 糸 郎 育 に つ な が て で つ す ŋ 0 を ま が 竹 そ 楽 つ 0 中 年 ほ ら

٤, 糸 玉 に 屋 を 提 嫁 b 灯 け よう 可愛さ ع 釣 Þ 鐘 相 ح 対 0 ほ 11 与 そ 死 ど う 次 P 0 0 話 気 郎 ゃ 違 が進 に 0 り 11 必 な か で ん ŋ 死 ね 纏き で ま 0 11 運動 じ 仮 ŋ た そ 親 き の 若 で が う で も立て 効 b 11 を 者 な た。 奏 0 11 情 縁 て 熱 て 談 春 に で に 近 引 な 頃 摺 た に 5 が 9 な た 9 て 理

を 分 養 け 11 て 娘 0 お 外 幾は か ら養女 金 <u>Fi.</u> でも迎え 郎 ع 緒 ることにな に する はず る で で よう。 た が 自 簾ん

が 帰 あ 飛 9 つ ち た ん て で か す で うど娘 来 れ 5 何 ば 気 7 方 愚 が か が 言 娘 痴 付 泊 が に < う 納 りに行 盗 ٤, な 大名道具 まるだ る つ た 与 追手 と決 つ 次 ろうと喜 た 郎 で 0 晚 め b香炉 0 話 た 掛 娘が寝んだ部 ょ け 0 が 6 う たよ 中 無く で な か 5, 無 う な る 理 に つ ح 難 平 たそう 題 屋 次 番 は で 頭 0 0 隣 辛 0 で 騒 ざ 甚 15 ぎ 置 11 b 筋 さ 娘 11 ん を が て

ぱ は な 古 甚 証 道 付 助 拠 具屋 付 さ で P ん て あ で わ お が け 改 ŋ つ 骨。 は ま 8 た 董ら な す る 0 に ع か 11 ع は 香 11 娘 申 炉 11 ち で 0 稽古本を お ま b 娘さん う す 隠 眼 が そ た が 包 利 れ ん 盗 ん に で く つ だ だ な たと言 ろ 風 け 困 う 呂 れ 9 敷 た ば う ح に 隠 ع は 風 灰 呂 す ? 親 が P 0 61 売 私 灰 2

読

み

取

ŋ

ま

す

す る品 ます。 う る な仏様 と申 しては、 何彼と都合がよかろうと、 ばかり。 でも、 親分さん、 鍋や釜や、 大それた品を持込んだら、 私などは古道 古 いお 勝手道具や、 こう思 具屋と申 つ てい すぐ 、る様子 知 せ れ いぜ ても て e s でござ 化 店に ま けそ

「---で、娘さんはどうしたんだ」

帯 欲 持 緒 品 掛 刀 際 頭 9 う を許され る 限もな 風 が と言 伴 か、 出 0 情 なら、 れ て が 親 来るまで、 7 つ て参りました。 い愚痴を封じて、 た 時、 分 ても、 縛られても繋が 0 あ 娘を誘拐すように、 町 んま 私 b 人はやは 娘は玉屋さん ツイ ŋ ひ ど 去年 平次は ポ り町 れ 4 ン の 秋甚 ポ ても文句は 仕 話 打 ン が 助さん 同士でございます。 断りましたが、 預 でございます。 0) つ る 要領を辿 れて行 と申 が、 ありませ って宜 て、 りま 娘を自 ん そ お 甚 分の が れ 助さ 11 た ま を 0 苗字 根 嫁 お 手 が 7 に

与次郎 ょ の 愚痴は 解 つ 際 た よ。 限 もあ そ りま れ じ Þ せ 玉 屋

行

つ

て

見よう、

が

「有難うございます、親分さん」出さえすれば文句はあるまいから」

Ξ

P 離 大名屋 平 れ 7 敷 お ガ ほ ラ り ŧ ど ッ せ 0 八 家と、 ん は が、 す 古道具屋 なるほど提 本 郷 与 次 灯 目 ع 郎 ^ 釣鐘 飛 0 小 び 以上 さ ま e s 一の距り 汚 店 玉 は で す 丁と 兵衛

最 初 に 行 つ た の は玉屋、 打 合 せ が あ つ た の で、 待ち構えたよう

に 主 が 迎 え て さ つ そく 奥 ^ 案 内 しま た。

香 炉 0 無 く な つ た 0 は ح 0 部 屋だ が 雨 戸を 締 め る どこか

らも入りようはない――」

香 炉 は あ 0 箱 に れ てあ つ た 0 で よう ね

平 次は 違 *( )* 棚 に 載せてある打紐 0 掛 つ た 時 代 付 0 桐 箱 を 指

ました。

付 かな そ 0 通 か つ り た だ ょ 0 は 迂濶 親 分、 **3** 箱 か 裸 5 抜 に か て れ お た け 0 を、 ば そ 翌 る 0 晚 H 0 0 朝 う 5 ま で 気が 気 が

付いたかも知れないのに」

「紐は結んでありましたか」

に 確 つ か ね に 結 て ん で 正 あ 面 か つ た ら見ると結 はずだが W で 今 朝 あるよう 莧 る ع に 解 見 ( J た せ 0 7 を 11 宜 た *( y* 加 減

「余程急いだのですね」

金兵衛 は 平 次 0 顔 を 見ま た 0 紐 を 結 ん で な か つ た ع 11 う

が 何 か 手 掛 ŋ 0 \_\_\_ つ 0 ょ う に 聞 え た 0 で す

隣 0 部 屋 K ح 晚 泊 9 た者が 盗 つ た 0 な 5 紐 く 5 11 結 ぶ 隙 は

あったはずですね」

平 次 は 明 か に お 糸 の冤を、 た つ た 本 0 真なな 田だひも で 証 明 う

としているのです。

b 2  $\boldsymbol{b}$ お糸さ 6 が 誰 か を手 引 て 入 れ ると 別 で す ね 親 分

さん」

立 つ 誰 7 Þ 11 5 る П を容 のは三十前後のちょ れ た者 が あ りま つ す。 ح 好い Š り返 男 ると、 卑屈な薄笑 平 次 0 41 後 が 薄 ろ に 11

唇の上に残っております。

「お前さんは?」

ヘエ 番頭 の甚助 でござ います、 ^ 工

甚 助は  $\Box$ の過ぎた のに気が 付 いたも 0 か、 揉手をしながら尻込

みをしております。

お糸をつれて来たそうだ が、 お 上 0 御 用 b 勤 め る 0 か 11

平次の舌は辛辣でした。

とん でも な e s 支配 人 0 申 付 け ょ ん どころ な あ な

事を致しました、ヘエ」

「支配人を呼んで貰おうか」

「ヘエー\_

甚 助はキリキ · リ 舞 いをしながら飛んで行きました。

<sup>「あれは子飼いですか、旦那」</sup>

三年 ほど前、 名古 屋 から添状を持 つ て 来 た 男 だ が ょ

気の 付く働き者で、 今では支配人の片腕 のように な つ て e s ますよ」

そんな話を聞きながら、 平 次は縁側 か 5, 霜解 け 0 ひ ど い庭な

どを見ております。

「昨夜は暖かでしたね」

「そう、凍らなかったようだが――

「人が歩 け ば、 足跡 が 付くはず ですね、 庭石 0 あ 通

だし」

平次は ここでも、 お 糸 が 曲 者を手引 たと e st う、 甚 助 0 疑を粉

砕したのです。

へ支配人の庄 八 が 飛 ん で来ました。

親分さん、 御苦労さまで。 私の指金 で、 お糸さん に来ても

5

13 ましたが、 とんだお叱言を頂戴したそうで、 まことに相済みま

せん、ヘエー--」

六十近い、 よく光る頭を撫でて、 すっ かり恐れ入って お ります。

叱言をいうわけじゃ 無いが、 嫁入前 の娘 **^** 傷を付けちゃ悪

と思 つ て、 ツイあんな事を言って見たのさ」

「~エー」

「そのお糸さん はどこに いるんだ、 ちょ e st と逢 つ て見た e st が

「これへつれて参りましょう」

と庄八。

「いや、此方から行こう」

ヘエ、 -それじゃこうお出 でなさ e s まし」

平次とガラッ八は、 庄八と甚助に案内されて、 廊下続きの 裏 0

離屋へ行きました。

が、 縁 側をグ ルリと 廻ると、 多勢 0 足 音 に 驚 11 た 様 子 で、 障 子

を中から開 けて、 パ ッと飛出した者があ ります。

「あ、若旦那」

声を掛ける庄八を突き飛ばすように、

庄八、 甚助、 お前達は、 寄ってたかってお糸を泥棒にする気 か

ر با ∟

うまでもなく玉屋 屹 とな つ た 0 は、 の \_ 一人息子の金五 + の 典 型的 郎、 な 大 店 お お だ た 今までお糸を慰 0 若 且 那 で て す

のでしょう。

とんでもな

*( y* 

若

日

那

5 宜いよ、 俺がこの家を出て行く 解 ったよ。 お前達が、 か、 お前達に身を退い それほどお糸を目の敵にするな て貰うか 何方

か にするから」

若 旦 那、そんなわけじゃございません。 現に銭 形 の 親 分さん \$

お糸さんに怪 しい事は ないと仰 しゃ ったば か りで

「あ、 庄八にそう言わ 形 の親 分、 れると、 助けて下さ 金五郎は į, 始 め て気 e st つ等が企ら の つ いた様子で Ĺ お糸

を殺してしま i, 、ます」

11 きな り平次に飛付きました。 わ がまま息子らし 11 激 情 が

<u>~</u> んに 爆発 た 0 でしょう。

きま い簪を顫 平次は静かに宥 した。 わせて泣 そこに ( ) めながら、 は十九になるお糸が て いるのです。 金五 郎が今出て 木 綿 来た離屋 0 不 断 着 ^ 0 入 まま赤 つ て 行

処女に、 平次は しばらく黙 何を言 ってや つ て 見 つ たところで、 てお りましたが、 無 駄だと思 誇りを傷 つ た つ け 0 られ か た

八、 お糸さんを家へ送 って 行くが宜 ( J 後 か ら俺も行く から」

八五郎を顧みて、 率直に言 います。

エ

P ガラ 0 の ッ 八は ح 0 ほ 時 不 ん 思議そう 0 少し ば か り躊躇 顔を挙げたお しました。 糸は、 泣き濡 全く 美 れ ては 過ぎた 11 る

0 で す。

平 凡 平次はそ な娘 で れ か 踊 5 は天才的 養 4 娘 だ と聴きまし 0 お 幾に 逢 たが いました。 きり ょ ح れ う は は 世 間 向 つま 並 0

り

0 愛情 の 上 しか 感じ 金 Ŧi. 郎 な とは 11 5 藁り の上 お糸と か ら e s の つ 濃ま し Þ ょ か に な 育 仲を見せら つ て、 兄 妹 れ ても、 て

P

追

つ

ことではな

が

を

捜

出

向 無関心 で いられる様子です。

0 者 P ع 通 り逢 つ

蝉步 の香炉はこ の家から出た様子 はありません。 無く な つ てま

だ半 日も経たな e s ん だから

はこう結論 す るよ り外 に は な か 9 た 0 で た。

## 四

間 もなく平次は、 与次郎の古道具屋に現わ れました。

有 難うございます。 親分さんのお蔭で、 娘も無事に戻りました。

縁談 には面白く ないことですが、 後 のところは若旦那が、 何とか

して下さることでございましょう」

与次郎は、 金五郎 の 純情に委ね切っ て、 娘 0 幸福を疑う様 子 8

あ りません。

「安心するのは 早かろうよ、 まだ香炉 が出 た わ け Ú Þ な 11 か らな

平次は、 併し、 釈 然とした様 子も あり ま せ ん

ヘエ すると、 どんなことになりましょう? 親分さん」

「香炉が出 て来なきゃ、 玉屋は申訳が立つまい。 大名 軒に瑕瑾

つく か付か ぬ かの騒ぎだ

ヘエ

「金に 付 も宝にも 代え難 · 1 e s 主人 品 だと 腹 e st うから、 切るか、 玉 屋 曲者をは の身上を 振 つ 7 b

敗する か、 ばらくは祝言どころの沙汰ではあるまいよ」

エ

与次郎 の顔 人には、 ありありと失望の色が読めます。

じゃ ع な ح いが、 ろで、 ほ んの念 家の中を見せて貰いたい」 の ためだ。 十手捕縄 に 物を言 わ せ る わけ

「ヘエー」

不満 5 *( y* 響きが 平次の心を焦立いの心を焦立 たせます。

「玉屋も念入 りに調 べ 奉公人 の荷 物もみ んな見せて貰 つ た

香炉はござい ませんでしたか、 矢張り」

「無い」

ーそれじゃ 致 し方がございません。 存分 に御覧下さいまし」

「気の毒だがそうさして貰おう」

平 次 はガラ ッ八をさし招くと、 二人 で狭 4 家 の 中 を 捜 始 めま

した。

が、 狭 と紛れるはずもありません *( )* ガラク 、 と 言 翡翠のような美し タ っても、 0 山 0 商売柄道 ような店 い 青 磁 具が多 か 5 の香炉と *( )* た 0 つ で、 いうのですから、 た 相 と 間 当の 0 手間を 居間、 取 外のもの お ります 勝手、

床下 から天井裏から、 水<sup>みずがめ</sup> 0 中 まで b 覗 11 て、 刻ば か ŋ 後

は、

無い

えな は ح おどおどしながらそれを眺 平 次とガ 傍若 い様子ながら、逃げも隠れもならず、 無 人な家 ラ ッ 八 捜し は、 元 の済む 0 店 のを待 め に顔を見合せてお るば かり、 ってお 美しい顔を反け勝ちに、 娘 ります のお糸は、 りました。 見るにた 与次郎

な 親分、 6 かありませ 香炉 ァ は 擬<sup>まが</sup> んぜ い備前焼 のと、 銅が のと、 たった二つ切 りで青磁

ラッ も少し不平そうです。 ح 気品 の高 11 娘の怒

いつまで続く家捜しでしょう。

ら 盗<sup>ょ</sup> よし、 きゃ な よし、 るま つ た様子もな *i* 1 これも念 こんな ( ) の ためだ。 事で引あげよう とすると、 丟 屋 消えてなく に か、 もここに 八 な b つ たとで 無 も思 外 か

何と言う器量 の悪さ、二人はスゴスゴと神田 ^ 引揚げます

親 分、 今朝玉屋から出た者はあ りません か

思議 な こと お糸が 出 た つ 切 り、 猫 0 子も外 ^ 出 な 11

二人は歩きながらこんな事を言っておりました。

「それも無い」

から来た客は?」

「じゃ、香炉は玉屋にあるわけですね\_

お糸が 持出さなき そう言 うわ け だ

用 持出させる術はあり ませ

た切 「それも考えたが、酒屋米屋 りだ。 香炉を受取る隙などはな 0 御 用 11 聞 は、 あ 0 お 通り 勝手口で下 人目が多 女に逢 から」

人は しばらく黙 つ て歩きつ づ けま した。

親 分、 番頭 の 甚助 は 朝のうちに出て いるでしょう」

ガラッ八は顔を挙げます。

は筋 れを忘 が立ち過ぎて れ 7 e s e s た る 0 から、 さ。 甚 朝 助 0 は うちに お 糸 0 出 迎 た 11 間 出 勘 定 する を

忘れたのさ」

途 中 で 炉 は 隠 せ な 11 で ょ う か 親

に ほ 玉屋 ん 0 から与次郎 Ŧi. 六軒 か 0 家が 古道具屋ま な · 1 で、 物を隠す場所は た つ た 半 町そこそこ な 11 ように 思うが そ 間

待ってくれ八、 ともかく引っ返して見よう」

はずもあ その辺は軒を並べた明る 平次は踵を返すと、 りません。 元の本郷一 e s 店造りで、 丁目 物が隠せる場所などがある ^ サッと引返しましたが、

「無いな、八」

誰 品かに渡 したん じ ゃ あ りません か、 時刻を打合せて」

「そんな暇はなかったはずだ」

人は黙 つ てまた神 田 取 つ て返しました。 万策尽きた姿です。

五

そ 0 晚 は 事なく過ぎましたが、 翌る日 0 朝、 玉 屋か ら急 の 使で、

平次は飯も食わずに飛んで行きました

「親分、香炉は出て来ましたよ」

番頭の甚助 って行 0 くと、 顔は店口 主 に 輝きます。 の 金兵衛も支配 人 0 八も、 全く蘇っ <sup>よみがえ</sup>

たようでした。 こんどは羽が生えて飛び出すとでも思っ 庄 たのか、

を 繞ぐ 翡翠色の美し つ 大名屋敷へ持って行く支度の出来るのを待っておりま い香炉を奥座敷のまん中に据え、 二三人の者がそれ

す。 炉 親 は 返 分、 って ع 来ま ん だ騒ぎをさせ て済まな か つ た が、 0 通 り蝉丸

主人の金兵衛は笑み崩れそうで炉は返って来ましたよ」

「どんな具合に返りました、旦那」主人の金兵衛は笑み崩れそうです。



©2017 萩 柚月

137

## と平次。

今朝起きて見ると、 ح 0 部屋 0 床 0 間 に、 チ  $\exists$ コ と据えてあ

るじゃない か、 いや驚 ( ) た の驚 かな

「娘だよ」

誰が見つ

けました」

お終く の無表情な顔を、 平次は 部屋 0 隅 っこに見出

戸締 り んはどこ か変っていなか つ たろうか」

平次は誰 へ言うともなく後へ振り向きます。

気がつきませんでしたが――\_

庄 八甚助も、 何の心当りもな 11 様子です。

たが、 平次は奉公人達を案内させて、 戸締りにも、 庭の霜柱にも何の変りもありません。 念 入 りに家 0 内外を見廻りまし

れほどの 品を、 家の中に隠してあったとは思われな e s 八、

もう少し念入りに見てくれ」

鼻 の 良いガラ ッ八を先に立てて、 庭から塀 の 外を捜 し廻りまし

た。

を指さしま 変な 支配人の庄 とこ した。 ろ 一八は、 に 棒 長さは二間 が 裏口 あるが から出ると、 位、 誰 がこんなところ かな り逞まし 路地 の出 ( ) 口に立てかけた棒 ^ b 持出 0 で元の方に たん

は、 たた か に 泥 が着 11 て お ります。

植 木 の突っ か e s 棒ですよ、 誰が持出したんだろう?」

甚助も心当りがない様子です。

出 る 物じゃ な 11 が、 どれどれ」

庭 へ持込んで、 平次は いきなりその棒を取上げると、 屋根へ掛けて見たりしましたが、 塀へ立てかけて見た 離屋の 軒の下に、 り、

右前後から見廻しておりましたが、やがて木戸を押しあけて庭へ 箇所霜柱の の砕けたところを見ると、 そこ へ捧を立てかけて、 左

入ると、 ちょうど奥の部屋 の前あたりにピタリと立ち止 ŋ ŧ した。

「梯子を貸して貰いたいが――」

0 物置 から持って来た 九つ梯子を雨落ちに 据えると、 番上

はちょうど雨戸の欄間に届きます。

れを登 つ た 平 次は 黙 って調 べ て お り ま たが、 しば 5

ると、 一人で呑込んだまま降りて来ました。

何か変 ったことがありました か、 親分さん」

支 の庄八 の心許な e s 顔を見ながら、 平次は 静 か 11 切り

丸の香炉 「大変ます。

大変な奴だ、 棒 本で塀を越した上、 離<sup>はな</sup>屋れ の庇に 登 つ て、

忍返しを除け除 けここまで来ると、 欄間をコジ 開けて音も立てず

に 入 は

泥棒 が 外 から入 つ て、 香炉を 置 e st 7 行 つ た の だろう か 親 分

主 の 金兵衛 もさすが に仰天した様子です。

な芸 当 0 出来 る 0 は誰 だ ろう、 棒 本 で ど ん な

ろ へも忍び込 む のは?」

捕 とをまだ 物 平 次 0 名 は 聴 委細構 と言 ( ) たことも わ わず首を捻 れ た平次です あ りません つ て が、 お ŋ ´ます。 ح ん な恐 多勢 ろ 0 悪 11 者 間 を 手 0 掛 け て、

平 庄八を伴 に 次 平 次 とガラ り 0 首が に ま つれ せ ッ 八と、 ん。 どう捻ろうと、 て、香炉を大名へ返しに出かけ、 支度 甚助とだけ の 出来た 香炉が が のをきっ 取残されました。 出 て 来 か た上は け に、 早春 主人 もう 0 0 庭先には、 間 金兵衛 題 b 何 は

番頭さん ح んなことの出来 る 0 は 誰 だ ろう、 見当 は 付 か 61

ね

解 りませ 6 ょ 親 分さん

甚 助 は 少 不機 嫌 で た。

る 実は 相 違な ね、 番頭さん、 ( J と思ったが、 こんな細 これを見て少しば 工を見る前まで か は り考え 曲 者 が 変 は 外 9 た に ょ e s

エ それはどう言うわ け で? 親分」

要ら から、 棒 て 外か ず道 で な 塀を乗り越 棒 具 ら香炉を戻しに入った曲者なら、 は bが ずじ 入用だった な Þ に て、そ な 入 *( )* つ はずだ。 か。 たほどの の棒を外 わざわざ裏庭に 曲 こんな締 ^ 者 なら、 これで出ま 最初塀 ŋ あ 帰 0 つ る 厳重な家 た植・ を 時 乗 だ 木 越 つ た 0 し て ^ 突 棒 7 入 音 つ な る か 立 時

ぬば かりに 置 いて行く のはおか e st じゃ e s

平次の 慧い 眼がん は 妙なところま で見透しま す

して、 めに、 宜 いわ けだ 開 棒 は け を 内 から」 て 使 に お って、 いる者が、 いた木戸から入って、 つまら 外から曲者が入ったよう な 11 細工をした 後を締めておきさえすれば のさ。 、に見せ 棒を外 か 放き け るた

「なアるほどね」

ガラッ八は長い顎を撫でております。

ろう 聴 恐ろ 4 た事がな の 家 0 中に、 間 が 11 から、 11 棒一本で庇へ登って、 るに相違な 多分他国か e s ら流れ込んだ、 江戸ではそんな悪者 欄間を鼠のように渡れる、 兇状持の 仕業だ の話は

持 奉公人も十二三人いるようだが、 平次はここまで追い詰 三年前に来た甚 助 めて行っ 苦 い顔というも たのです。 他国、 遠国 の者は誰々だろう」 名古屋から添状を のはありません。

六

いう時、 そ から四五日、 また つの 大き 無 事 に日が流 e s 事 件 : が 起 れました。 つ た 0 です。 やが て 二 十日正 月と

「親分、大変だぜ」

「なんだ八」

いきなり飛込んで来た八 五郎 は ば らく 口 P 利けません。 が

捺

7

な

か

つ

た

0

番頭が 殺されましたよ」

え

玉 屋 0 番 頭 0 甚 助 が 湯 島 0 聖堂 で絞 め 殺され て 11 る の を、

往 来 0 が 見 付 け て大騒ぎし て 11 ますよ」

五 郎 0 報 告 は 全く 大変でした。

そ れ 行 つ て 見ろ」

駈 け 付 け た 0 は、 まだ卯<sup>t</sup> 刻っ 半そこそこ、 往来 0 人 は、 聖堂裏 0

け て お ります。 淋

11

木

立

0

下

に

立

つ

て、

物をも言わずに、

緊張

た

動揺

を

退 た 退 ( ) た

八 Ħ. 郎 に導か て ( ) れ て 行 は、 つ て 玉 見 屋 る ٤, 番頭 大 甚 溝 助 0 中 死 に 骸。 落込 まだ検 ん で、 艦ぼ 褸ヶ 切れ 済

ま な 0 で 手 を 付 け る者  $\overline{b}$ あ りませ  $\mathcal{K}_{\circ}$ 

0

ょ

う

に

な

つ

る

0

0

0

死

が

た。 は紫色に 平 恐ろ は 腫 し 11 きな れ 11 強 上 力 が ŋ に 水 つ て、 締 0 な め 5 11 た れ 大 た 溝 眼と見ら  $\boldsymbol{b}$ に 飛降 0 と見え ħ り な て て、 11 悪 近 相 喉 々 仏 です ح は 死 が 砕 骸 け を 見 顔 色

お Þ ?

驚 11 たことに 死骸 0 下 に は 山 吹 す。 色 0 小 判 が 枚 キラキラ

拾 11 上 げ て見ると、

ع

氷

0

中

に

め

り込ん

で

光

つ

て

11

る

0

で

あ ッ

て 平次が 9 検な て 印ん b 度 び 宜 つ 11 ほ ど り 真新 た 0 P 11 真 無 です。 理 物 は で す あ りま が せ そ ん。 の表 に 小 は、 判 は 吹き立 あるべ

蝉丸の香炉 きはずの

親分」

金五

大急ぎで奉行所 ^ 飛 ん で行 って、 書き役 から、 近頃検印

な 4 御 用 金 か 何 か 盗 ま れ た 事 が な か った か 訊 11 て来てく

エ

Ŧī. 郎 は そ う囁 か れると猟 犬 0 ように 飛 ん で 行 きま

次 は そ 0 上 調 べ ることが な 11 ح 思 つ た か、 溝 か ら飛 出

1 目 0 玉 屋 ^ Þ つ て来ました。

形 0 親 分さん、 今お迎いに行 ったところで

す つ か り 顚倒 した庄 八は、 平次の顔を見ると ^ タ タと 坐 つ 7

しま e s ま た。

う べ 番 頭さん が 家を 出 た 0 は、 何なん 刻き 時 分だろう」

平 次 は 手 つ 取 早く 調 べ に か か りま ず。

私 は存じませんで した が、 店 に (J た 小 僧 聴く 亥』刻っ 少 過

ぎだ つ たそうでござ います

「もう一人 出た はず だ が

平次の問 のさ り気なさ。

でも、 若 旦那 は すぐお帰 りに な ŋ まし た ょ

庄 八 は ツ 1 ح ん な 事まで 釣 ら れ て しま つ た の

っそ 若 旦 那に 逢 41 た ( ) が

平 次 は 有 無を言わ せません で した。 すぐ 奥 ^ 通 つ て、 若 且 那 0

金五 郎 に 逢うと、 興奮し 切って ( ) るのも構 わず、 グ ン グ 間 を進

めます

ゆうべ

甚

助

の

後を追

つ

て

出

たそうだ

が

ど

ح

^

行きなす

つ

た?」

どこ 立郎は突 へ行 った っ張りました。 つ て 構 わ な *( )* Þ あ りません

P

つ

とも出る時手間取ったのでどこへ行ったか、

すぐ見失ってし

構 わ な いようなものだが、 甚助は殺されていますぜ」

自業 自得さ。 あ んな悪い野郎は な *( )* 誰も殺してくれなきゃ

この私が殺すはずだった」

金五郎の怒は容易に納まりません。

「それはどう言うわけで?」

「お糸をつけ廻して、 ここへ寄 り付かれな いようにしたの は 0

野郎ですよ」

だが、 その 甚 助が 殺され て *( )* る 6 だし

「宜い気味だ」

そ の殺された 甚助 0 後を追 って、 出 て行 つ たお前さん にも疑い がい

掛 から づずに は済 むま · 1 もう少し前後 の様 子を話 して貰えま *( )* か

平次は穏やかに話を進めます。

「金五 郎、 親 分 へみんな打開けるがよ *i* , つ まらな 11 事を言うと

取返しが付かないよ」

奥から、 騒ぎを聴 ( ) て出て来た、 主人の金兵衛も言葉を添えま

す。

お糸を み ん なで邪 魔に する か 5 ح ん な 事 に なる 0 です

あんな済した顔をしているけれど、

甚

助をけし

け てどんなにお糸を苛めたかわからない」

お幾なんか、

金五 郎 0 怒は、 憤 々として、 どこへでも焔 を挙げま す。

つまら な ( ) 事を言うな、「 -それより昨夜お前はどうしたんだ」

金兵衛 は 聴きかねた様子で、 金五郎の肩を掴みました。

いずれ どう 悪 P 11 事の支度だろうと、 やしません。 甚助がコ 後を跟けて行ったまでの事です。 ソコソ外 へ出て行くから、 また

合 ま 0 난 与 e s ま る した 郎 0 P は ڕ 留 イ 守 ヤ だか のようだ しばらくお糸 5, すぐ戻 留 の家 守 つ 番 て来て寝 の前に立 に 頼 ん だ て つ しま 近 て 所 i s た いま 0 け 婆さ し れ たよ ど、 ん 顏 親 を 父

燃え ば 頭 相 見 ツ B 金 れ 五. 7 ま か 金 ん 立 胸 郎 りで、 五 次 な な た。 た 郎 は 0 9 0 事 心 奥 た b 何 (J 何を訊 疑を残 に 件 外 b が急速にそ 時 か 11 見 秘さ が 彼 間 < な に も忘 ん 起 甚 か るべきでし i s らか穏やかに いても解りません。 つ 一助を、 で ら言え して今度はお幾に逢いま たはずの金五 て、 11 れようと骨を折 た、 っちへ傾 ば、 いろ 締 よう。 金 め 間 な Ŧ. *( )* 殺 ろ 郎 違 つ いて行くの せるとは、 郎ですが、 の て、 ح 11 激 お もなく つ 多分、 情 た 糸 ح 的 れ に 0 した。 だけ 対 な を見て、 お糸が出現して 甚 で 若旦 どうも受取れません。 する 場面を見 しょ 助 0 0 那育ちの 殺され 事を説 う。 が、 深 11 深 せ 時 これは泣 が は た 明 7 細腕で、 時誰 か け 踊 端 5 てく に な 没

平次は づ く考え 黙 つ た て 引 0 です。 揚 げ ま た。 0 广 お 幾をさ 11 な 残酷 さを

七

そ の足 で すぐ 与次 郎 0 古道具屋を訪 ね ると、 与 次郎 は 眠そうな

「眠そうだね」

顔を

て、

店

に

坐

9

7

な

り

ŧ

た。

ヌッと入った平次

親分さん 1 ヤ な事 ですね、 私 は 根岸 の友達が 死 ん で、 お 通夜

に 行 つ 郎 て 何 は に ゴ b ク 知 IJ ع らずに今 臆 病ら 帰 つ たば 固<sup>か</sup>たず を呑 か り で みます す

「根岸の友達?」

四十 7 11 ま エ に す な が ったば 友達と 上根岸 か 11 0 りですが、 つ 源三郎店に ても、 商売仲 昨 11 日 る、 1の朝卒中に 間 で、 喜六という男で、 十 年 にやられて、 も前 から 懇意に 後 が まだ に

聞 く ٤, 平 次 は もう 押 し て 訊 ね ることも あ り ま せ

房

子

達

が六人、

可哀想で

見ち

Þ

e st

5

れませんで

したよ

来て 店 は 0 仲 平 0 ·世話· 喜 次 が 間 六 はそ П で を を b と言う 揃え して あ れでも念 ŋ 小 \_ と て証 道 格 晚 具屋 別 明 0 みん た 0 間 て は め 間 お な 柄 に 違 上根岸まで伸して り ع で ます b 11 緒 あ b に な つ 仏 た与 < 昨 0 次郎 伽ぎ 日 を 0 見ま 朝急 が したことは、 した。 明 死 る て 11 源三 内 昨 郎 勢 6 夜

郎 は 刻き 時 間 く 5 11 抜 け 出 た ع 思 う が 誰 気

が付かなかったろうか」

平 次 は 念 0 た め に 訊ねて見ま した

立 抜 반 な け 引 つ たで き 出 す 切 睱 り な み ょ なん う 6 が な気 に か ` 飲 ありゃ ど が ん んな長雪隠 で食 付きますよ」 しませ って、 ん。 で 百万遍 P b 四半 つ b とも、 刻 称え (三十分 7 手<sup>ち</sup>ょうず た く 6 5 で لح 姿を す 11 見 は

「なるほどね」

気 ゴ を が 別 そ う言 ゴ 9 か タ ず わ て に、 たに れ る 外 して ح 抜 か け 5 \_\_\_ 来 出  $\boldsymbol{b}$ 言 せる道 た P 与 あ 0 次 は ŋ 理 郎 ま 精 は 0 せ 々 あ ょ 十 二 6 う り ませ 三 な 昨 中心人 夜 人 ん 0 お 狭 物 通 13 夜 は 兀 は 0 中 刻 家 は 族 相 0 に

外

には心当りが

無

11

そうですよ」

与次郎は何をしていたろう、 亥刻から子刻 の間 の事を聴きた e s

が

幸 e s 聖堂 裏 0 甚 助 殺 しもここまで は 知られず、 平 次 は 思 11 0 儘

こんな事が訊けたのです。

手へ行ってお燗番をしたり、 あ の 男 は 不思 議 に 念仏嫌 11 料理の手伝 で ね、 百 e s をし 万 遍 た が りし 始 ま る いました お 勝

ょ

難う、 とん だ邪 魔をし て済まな か つ た

平次は 何ん 0 得るところもなく、 本郷 帰 って来ました。

ちょうど玉屋へ入ろうとすると、

「親分」

店 0 中か 5 飛 んで 出た 0 は 八 五 郎です。

「解ったか、八」

それが解らねえから不思議で」

一人は物蔭へ歩み寄っておりました。

検 印 の な 4 小 判を奪ら れ た事が、 奉行所 0 記録 に b 無 11

のかい」

「十年この方ありませんよ」

「はてね?」

+ 年前 0 帳 面 ま で 調 べ たが、 矢張 ŋ あ りません」

「フームー

「二十三年前、 金 座 の後藤 ^ 忍込ん で、 小 判で三千両 盗 ん だ大泥

「少し古いな」

棒

が

あ

ったそう

で

一夕し世した。

屋 の 主 一人は 幾つだろう」

Ħ. + 幾 つ で う

支配 庄 八 は六十 近 11 な

死 ん だ 甚 助 は まだ 赤 ん 坊 だ つ た は ず だ 古 道 具屋 0 与 次 郎 b

ほん の子供 だ つ た

親 分、 二十三年 前 0 泥 棒 な ん か 詮な 索さ て Ŕ, 何 に b な り ん

ぜ

「そうか b知 れ な 11 な

は 玉 屋 か ら遠 < 裏通 りを選 つ て、 聖堂裏 0 方 ^ 歩 11 て

りま た。

た番 待 頭 待 0 甚助 て は 俺 は あ 大変な の朝香炉を持 間違 4 をし 出 して、 て 4 たらし 古道具屋  $\epsilon \sqrt{}$ ぞ。 行 前 殺 さ 何 れ

処 か 隠 た とまで は考えた が、 表通 り ば か り 捜 た 0 は

手 ぬ か りだ 寸 裏通り ^ 廻 つ て、 隠 場所を捜せ な 11 は ずは な

わ け だ

ど 行きな さる ん で、 親 分

つ て 跟 W て来る が 宜 4 そんな に遠 な 11

平 次は ( ) きな り、 あさり店のだな の裏 つから、 御ぉい 小人屋 敷 定 火 御 役

屋 今 元町 0 方 ^ 行 きま し た。

塀 0 下 石垣 の 崩 れ 積 ん だ 材木 0 隙 間 を見て 行 く うちに

0 辺だ、 甚 助 は家 か ら 持 出 た香 炉をこ の 辺 に 隠 て 空から 手で で

古 道 具 屋 行 つ た に 違 11 な

れ 手を差 は 独 り言を言 込みま 11 た。 なが 5 人 目 に 狭 付 11 路 か 地 な 0 13 ところ、 中 0 ح あ 子 供 る 石 0 手 垣 0 0 届 崩

足

の早

11

こと。

す。 大 か な 0 11 とこ 背 0 ろ、 高さほど 泥や下水に汚されな 0 石 垣 の崩れた穴が いところと言うとなるほど、 一番恰好な隠

「あッ」

か が二三十枚 平 次は 思 わ ず声を立 そ 0 いずれも、 てました。 検印 0 引 な 出 11 品 た ば 手 に か りで は、 は 山 あ 吹 色 り 0) 判

八

ました。 0 夕 上 刻、 根岸 上 0 喜六 野 0 鐘が六 0 葬 定 つ ^ を 行 打 つ つ て ع 4 (J た 古 つ 道 具屋 ょ に ` の 与 大変な使を受取 次 郎 は、 そ 0 日 ŋ

本 息を切 郷 0 つ 与 て 次 飛込ん 郎 さん だ は 0 (J は ま す 顔見知 か り 大、 0 町 大変な 内 の若 事 い者 が です。

お、町内の方、何が起ったんで!」

葬じい 跡 形 付を手 伝 つ て *( y* た 与 次郎が 顔 を 出 す

お糸さん が、 若旦 那と逃げ出 したよ、 書置きをして」

「えッ」

行 先 は 東 海道 だ、 江 0) 島で心中をするん だ つ て

「しまったッ」

与次郎 は 飛 出 「すと、 袷もせ 0 尻を端折 つ て 駈 け 出 しま した。 上 根岸

か 大哉なり 御 足ば 徒 で、 町 家 ^ 0 中を歩く 筋 違 11 か ら、 のさえ不自 H 本 橋 由そうに

して

( )

た与

次郎

0

26

用 事 そ は の頃の江 本 戸の町人は、 0 足で 駈 けるよ 滅多に ŋ 外 駕籠に乗れな に 方 法 は あ り ませ った W b急ぐ

見 だ を った 娘 娘 お て 征 お糸 に 服 は 5 する 相違 れ の な 命を救うため だけ 十九年間手塩にかけて輝く ありません か った の 自信があ 0 で す。 には、 が、 異常な 事実、 つ 与次郎 た 0 体 です。 右 はもう跛者などないはありに美に 力 0 の高股を切り 0 持主で、 ら し そ  $\lambda$ れ て、 ん か な 育 0 事 真 跛 7 足 似 た は

道行 た時 勢 *( )* か で 与次 駈 岸 ら引戻すことも けて行 か 郎 ら は  $\mathbb{H}$ ったら、 思わ 本橋まで、 ぬ 出来た 障害 品 川手前 ほ で 出 ん しょう。 0 つ 逢ゎ でお糸に追 兀 半 しまし 刻と が、 た。 b日 4 か 付き、 本 か 橋 りま ^ 差 そ せ ん 0 無 か 法 か な 9

「待て待て与次郎」

え?

天狗小 僧 0 与 吉、 -三千両 0 御 用 金 泥 捧、 玉 屋 0 番 頭 助

殺しの下 手 神妙 に お縄を頂 戴 せ 4

橋 の真 ん 中に通せ ん 坊をして e st た の は、 夕 闇 0 中 に b は つ り、

銭 形平 0 勝ち 誇 つ た 姿と 判 った 0 で す。

あ、己れは平次」

7 「上根岸か いるうち に、 らここま 聖堂 裏ま で 四 で 半 刻 行 で つ 駈 て け を つ 殺 け せ る 位 る な はずだ」 5 百 万 遍 を称

平次は、ツと一歩進みました。

向 大 手 を 拡 げ 突 つ 立 つ た 0 は ガ ラ ッ 八 0 八

五郎

銭形 0 親 分、 11 か に  $\boldsymbol{b}$ 俺は 天 狗 小 僧 十年堅気 で暮

た

は、 一人娘 のお糸が 可愛 e s e s ば か りだ、 そ の娘 の 出世を妨

げる甚助、殺したのが悪いか」

与次郎の声は凄惨でした。

「人を殺して悪くないはずはない」

と平次の声は冷たく響きます。

玉屋 あ ع 0 野郎 の 縁談をこ は、 無体の横恋慕をして、 わ しにかか つ た、 香炉を盗んだ罪を娘に着せ、 俺は昔取った杵柄 で、 感

を 働 か せ て 石垣 の 間 か ら香炉を見付け そ 0 翌る晩玉屋 へ返

が、\_\_\_\_

「棒をなぜ外へ捨てた」

あんまり り癪にさわる るから、 甚 助 ^ 少 しば か り 疑 が か るよう

したのさ」

平次 0 明察を、 与次郎は 裏書きします。

「その甚助を何で殺した」

年前 あ に 0 書 野 いた、 郎 の親は、 連判帳を種に脅か 俺 の昔 の 相棒だ。 Ļ お糸を嫁にくれと言うから、 それを知ってい て、 二十何

そ り Ŧ. + 両 で連 判帳を買 4 取ると約束し、 聖堂までおびき出

して殺したのさ」

そ の 時、 検印の な ( ) 小 判を一 両落し た のを気が つ か な か つ たろ

う、天命だ、お縄を頂戴せい」

人立ちの次第に多くなるのを恐 れ て、 平 次は ツト進みました。

待 った、 銭形の 親 分。 娘には何 の罪も な *(* ) 後を頼まれては下

与次郎の声は悲愴でした。

さら

ぬ

か、

天

狗

**小僧** 

生

0

お願

いだ」

よし、 引受けよう。 必ず金五郎と添わせ てやる」

有難てえ、 銭形 0 親分が引受けて下されば思 e st おく事はな *;* \

お 礼 心に、 三千 両 の隠 し場所を申上げる」

何 ?

せる あま 二十三年 ŋ 御み 前 に盗 石い 0 下だ ん だ 御用金三千両は、 左 の 小さ い楔を取っ 浜町 7河岸の ると、 子 石 供 置 場、 に b 取 百 貫 出

「よし、 解 つ た。 お 上 ^ 申上げ てお慈悲を 願 つ て やる。 お 縄 を 頂

戴 せ (J

平次とガ ラ ッ 八 の 挟撃は 次第に近 な つ て 来ま た。 橋 0 両 袂

に 群がる人数は 思 わ ず ワ ッ ع 喊がんせい をあげ ます。

親 分、 天狗 小僧 bŦī. + だ。 今 か 5 お · 処刑 ぉ でもある め え、 そ れ だ

けは勘弁してお < ん なせえ」

待 て待て

喉 に突ったてると、 と言う 間  $\boldsymbol{q}$ ありま せ そ ん のまま、 与 次 欄がんかん は 懐 越 か 5 取 闍 0 たがい 水 に落ち込ん 首な 自 分 0

ま

X

 $\times$ 

親 分 変な捕物だ ね

そ

の

帰

り途、

ガラ

ッ

八

は

寒々

と愚痴をこ

ぼ

します。

を お 糸 ^ 言う 0 が と 仕 事だ。 何 か 親 の罪だけ で 胡ご 化か

しよう んはな ( ) か ね

死骸 は 揚 つ た 三千 両 0 小 判 は 出た 隠 しようは あ りませ

んよ

困っ た な 八

平次 はお糸 0 歎きを見る 0 が 何より嫌だ つ た 0 です。

親 分、 あ の石垣 の 穴に小判があったのは、 どういうわけです」

ガ ラ ッ はまた絵 解きをせが みました。

穴を 前 る場 浜 0 つ 連 思 町 所 判 0 (J 帳 出 石 思 に は竈の 置 して 置場か 11 つ わ か の 5 下か そこ な け に 見せ金 11 何 は行 ^ か 投り込ん フ か で焼 の積 ŀ 殺された な いた 41 りで五十両 で上根岸 のさ 甚 検 印 助 が が 持 ^ 香 な って 飛んで帰 炉を隠 11 来た から急に り、 が、 して置 は 死 摿 骸 た ع 7

ために、 で、 二十年前 なる 娘 ほ 0 育 ど ん ね に足を洗 つ な事 のを に 眺 な め つ た て つ 天狗 た た 0 小 0 は考えて見ると可哀想でもあるよ」 僧が、 は 殊勝 無事に天命を全うする積 じ やな いか、 その娘 ŋ

同士 次はしんみり言って、 の 気さえ確 り て お れ ば、 遅い 何 月を仰ぎました。 かな ら な 11 は 寒い晩でした。 あ るま

これから、

お糸と金五

郎を添

わせるのが

一と仕

事だ、

が、

お互

30

(編注)

ます。 底本の 作品中には、 なる古典的な文学作品でもあり、 が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異 ままとしました。 身体 の障害や人権に ご理解、 ご諒承のほどをお願 かかわる、 著者が故人でもありますので、 差別的な語句や表現 い申し上げ

挿絵―萩 柚月

初出 「オ ル讀物」 昭和十二年二月号 文藝春秋社

底本 月十五日初版 「錢形平次捕物全集」 第三巻 河出書房 昭和三十一 年六

編集・発行 銭形倶楽部



## 銭形倶楽部

http://www.zenigata.club/